

ワーケーションという新たな働き方

株式会社 Zooops Japan 代表取締役

わたなべ よしろう
渡部 佳朗 氏



IT企業勤務等を経て、2007年に株式会社Willink System (現:Zooops Japan)を創業し、代表取締役社長に就任。2017年には総務省「テレワーク先駆者百選」企業に認定。

■北海道とのつながり

(株) Zooops Japanは、東京に本社を置く従業員数60人ほどのシステム開発会社です。事業のキーワードとしてはITシステム開発や自社製品「365CITY WALK」というインバウンド観光向けのソリューションを使って浅草や知床、大阪、尾道などの地域を応援しています。また、地方創生やインバウンド、テレワーク、ワーケーションというキーワードで活動しており、北海道では、北見市と斜里(しゃり)町のサテライトオフィスでテレワークを行っています。テレワークを行うきっかけは、2014年11月に北見市のテレワーク視察ツアーに参加したことです。その後、北見市が、総務省のふるさとテレワーク推進のための地域実証事業として「北海道オホーツクふるさとテレワーク推進事業」を実施し、「東京都内に本社を置く企業として、テレワークを行いませんか」という打診を受け、本格的に取り組みました。斜里町には、そのふるさとテレワーク推進事業の一貫

として、2015年9月に初訪問しております。

次に、当社における北見市、斜里町でのテレワーク、ワーケーションの具体的な取組について紹介します。

■テレワークとは？

テレワークは、情報通信技術(ICT)を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方のことで、離れた所(tele)と働く(work)を合わせた造語。

テレワークは働く場所によって、自宅利用型テレワーク(在宅勤務)、モバイルワーク、施設利用型テレワーク(サテライトオフィス勤務など)の3つに分けられる。

■ワーケーションとは？

ワーケーションは、仕事(work)と休暇(vacation)をあわせた造語。IT技術の進展により、休暇中に旅先などで仕事をする新たな就業・休暇スタイル。

テレワークの取組について

視察ツアーに参加した翌年の2016年に、社員旅行で北見市を訪問し、当時の社員全員でテレワーク体験を行いました。その数箇月後には北見市長が、当社の顧客である浅草観光連盟を訪問し、次いで、浅草観光連盟の広報理事が斜里町で「SNSの発信講座」を開催するなど、相互にできることを探しながら、北見市や斜里町の交流人口の増加を目的に取り組んできました。



▲テレワーク体験旅行(上)と
北見市長の浅草訪問・視察(下) (北見市)

知床スロウワークス 特別講演会

世界遺産知床を みんなで 世界に伝えよう!

—住んでいる人には気がつかない魅力が観光客を引き寄せる—

2016/3/26(土)
17:30開場 18:00開演
斜里町産業会館 入場無料

浅草を 広報して わかった!

飯島邦夫 氏プロフィール
浅草観光連盟 専務理事
株式会社オーワイエス(株)代表取締役 CEO
1980年11月、東京都浅草区生まれ。浅草観光連盟専務理事として、浅草観光の振興に尽力。浅草観光連盟の発展に貢献。浅草観光連盟の発展に貢献。浅草観光連盟の発展に貢献。

主催 知床スロウワークス 後援 斜里町 協賛 斜里町観光協会
TEL.0152-23-1844(1F.2F.23.5F.50F)

▶ SNS発信講座の様子 (斜里町)



◀ 認定の授与式



▶ 協定の締結

取組開始から3年目の2017年には、北見市との間で「北見市と市内サテライトオフィスで『ふるさとテレワーク』を推進するIT関連企業とのICT環境を活用した地方創生に係る連携協定」を締結しました。この協定により北見工業大学と共同研究を行うこととなるなど、テレワークの取組が具体的なビジネス上の案件にもなってきました。また、斜里町では「経営者ワーケーション合宿」の開催や「東京ふるさと斜里会」に参加し、斜里町出身の方々と交流を深めるなど活動してきました。こうしたテレワークにおける3年間の成果が認められ、2017年11月には、総務省から「テレワーク先駆者百選」に当社が認定されたほか、2018年9月には、北見市が経産省「地方版IoT推進ラボ」に認定されています。

北海道の魅力

また、テレワークの取組がきっかけとなり、斜里高校で「全国高等学校・観光甲子園出場に向けて」というテーマで授業を行ったのですが、その後、実際に斜里高校は神戸市で開催された観光甲子園決勝大会(全国から8校)に出場しました。私も応援に行ったのですが、観光甲子園ではインバウンド訪日観光客を対象とした一週間の滞在ツアープランをプレゼンし、銀賞を受賞しました。ここで私が感じたことは、北海道が持っている魅力は、全国に通じるものであるということです。斜里高校のプレゼンは、客観的に見ても一位を狙えるようなプランでしたし、180校がエントリーする中で銀賞を受賞するだけの可能性が北海道にはあることを実感しました。これは、ワーケーションを行う上でも大きなメリットだと思えます。



▶ 斜里高校が観光甲子園全国大会に出場(右下が渡部代表)

北海道の魅力は、まず第一に、豊かな自然があることです。車で5〜10分走ればすぐに海や山、川があり、何より夕日が凄く大きい。こんなに大きな夕日は、東京ではもちろん見ることはできないですし、北海道ならではのダイナミックな景色だと感じています。

二つ目の魅力は、キツネや鹿などの野生動物との距離感です。季節によっては、鱒の遡上を見ることもできる、この距離感も東京では感じるできません。

ほかに、新鮮な食材がすぐに手に入ることや、厳しい冬でも豊富なアクティビティが体験できることなど、北海道には何度でも訪れたいような魅力が数多くあります。

ワーケーション in 斜里町

IT企業の経営者を対象に行ったワーケーション「知床、斜里視察ツアー」のスケジュールの一部を紹介します。

8:45	ホテル集合
午前中	流水ウォーク
12:00	「天に続く道」を観光その後、山小屋ジギスカン
午後	スノーモービル体験
17:00	ホテル着
夜	斜里町関係者と懇親会

▶ 流水ウォーク



◀ スノーモービル体験

午前中は、流水ウォークです。専用のスーツを着て、流水の上を歩いたり、流水と一緒に海に浮かぶといったアクティビティを体験します。昼には「天に続く道」という東京ではあり得ないほど真つ直ぐな道路がまるで天まで続いているように見える観光地を訪問し、昼食には山小屋でジンギスカンを食べて、午後にスノーモービルの運転を体験しました。これらの体験を終えた後、視察ツアーに参加した十数人が口をそろえて、「この日に体験したアクティビティ全てが、人生で初めての経験だった」と語ったことが印象的でした。初めて体験できるアクティビティが北海道にこれだけあり、「とても良い思い出になった」、「ワーケーションに参加して良かった」と大変感謝されました。



▲ 広報誌の取材を受ける様子

■ 親子ワーケーションの時間

次に、親子ワーケーションの一日を紹介します。最近、私は妻を東京に残して息子と二人きりで北見市や斜里町に出張に来ることがあるのですが、その際には、例えば午前中に、親子で斜里町広報誌の取材を受け、午後は休暇を取って、町内にある畑の草取りを手伝ったり、息子と二人でドライブして、川でびしょ濡れになって遊び、夜は地元の方と一緒に夕食を食べるなど親子でワーケーションを満喫しています。どうしても息子を連れて行けない打合せの時は、子供を町内の児童館に預けて、地域おこし協力隊の方に面倒を見ていただくこともありました。

親子ワーケーションではこのように一日を過ごすのですが、北海道でのこういった時間が私にとってとてもかけがえのない時間になっています。今では、ワーケーションとして、出張に息子を連れて行くことがマイブームです。

■ 成果

テレワークとワーケーションの成果については、「ワークライフバランスを大切にしたい働き方」、「ICTの人材育成」、「社員の採用や雇用」、「社員研修の実施」、さらには「地域の方々との交流」といった側面があり、それが最終的には産学官連携などによる具体的なビジネスにつながっていくと思います。

私たちのような中小企業は、ワーケーションだけに集中して取り組むことがなかなかできません。例えば、北海道で社員研修を実施したり、地元の方の採用などにつながらないと、継続的に取り組むことは難しいと考えており、当社では、そのような要素を絡めながら、テレワークやワーケーションを行っています。

テレワーク・ワーケーションの成果



■ 今後の挑戦

今後の挑戦ということでは、第一に私たちはICT分野で北見市、斜里町のそれぞれのサテライトオフィスに地元の方を採用し、地域の民間企業との連携を深めながら、東京都内と変わらない仕事を北見市や斜里町でも行える仕組みを作りたいと考えています。

また、もう一つのアプローチとして、北見市の食文化である北見焼肉を都内に持ち込み、東京の日本橋人形町に焼肉店をオープンすることで、「北海道オホーツクコミュニティ」をつくりたいと考えています。その店を基盤に、「ヒト・モノ・カネ・情報の流れを東京と北海道で循環させる」ということが私の次のチャレンジです。

幻の魚と共存した地域活性化の取組

しゅまりないこ

～朱鞠内湖で地域を元気にしたい～



メスのイトウが尾びれで産卵床を掘っている様子
(提供: 足立 聡)

ほろかないちょう
幌加内町

地域の現状

上川管内の西部に位置し、日本一のそばの作付面積を誇る幌加内町。町の北部にある朱鞠内湖は、雨竜(うりゅう)第一ダムの建設に伴って作られた日本最大の人造湖で、「幻の魚」イトウが生息する神秘の湖と呼ばれています。その朱鞠内湖を拠点に、特定非営利活動法人シュマリナイ湖ワールドセンターが行っている「イトウと共存した地域活性化の取組」についてお話を伺いました。

(取材者 橋場、榎本、加藤)

幌加内町は、そばの作付面積日本一・日本最大の人造湖「朱鞠内湖」・日本最寒記録「マイナス41・2度」という三つの「日本一」を有する町として知られています。町の人口は昭和17年の1万3千人をピークに、現在は1500人台まで減少し、人口推計によると2040年には900人以下になる見込みです。特に、町の北部に位置する朱鞠内地域では、今から10年後には小学校や保育所の存続が困難と考えられているなど、人口減少に歯止めがかからないのが実状です。

この地域の代表的な観光資源である朱鞠内湖は、北海道大学雨竜研究林に囲まれた豊かな自然が残されており、日本最大の淡水魚である天然のイトウ※をはじめとするトラウトフィッシングが楽しめるほか、冬には氷上ワカサギ釣りも体験できるなど年間約1万人の釣り人が訪れており、特にイトウを釣りに訪れる観光客にはコアなアウトドアファンが多く、長期滞在型でリピート率が高いのが特徴です。

また、キャンパーやカヌーイスト、野鳥愛好家などにも人気があり、アウトド



※ 1937年に十勝川で2.1mの個体が捕獲された記録がある

幻の魚「イトウ」

生息域・生息数の減少や、1mを超える体長から「幻の魚」と呼ばれ、釣り人たちの憧れの存在であるイトウは、サケ目サケ科イトウ属に分類され、国内では空知(そらち)川や雨竜川など北海道の一部の河川、湖沼に生息しています。かつては、東北地方北部にも生息していましたが、生息域だった河川の改修工事や釣り人による乱獲などの影響により絶滅しました。道内でも個体数は減少しており、現在では北海道レッドリストにおいて**絶滅危惧ⅠB類※**に指定されています。

また、サケ科は産卵すると死んでしまうイメージがありますが、イトウは一生の間に何度も産卵することができます。産卵期は4月〜5月頃で、中・上流部の川底5〜10cmほどの小石の下に、2千〜1万個程の卵を産み付けます。この時期のオスは婚姻色が表れることで全体的に赤みを帯び、メスをめぐりオス同士の闘争も行われます。

夏になり孵った稚魚は水生昆虫を食べながら成長し、成魚になるにはオスで4年以上、メスで6〜10年もかかると言われています。



▲産卵期のオス(右)とメス(左)のイトウ (提供: 足立 聡)

地域資源としての「イトウ」

朱鞠内湖を管理しているNPO法人シュマリナイ湖ワールドセンターの中野理事長は大阪府出身ですが、子供の頃から釣りが好きで、北海道で魚に関わる仕事に携わりたいと思っていました。平成6年にニセコ町に移住し、町内のホテルに就職しましたが、初めて朱鞠内湖に力サギ釣りに訪れた時、当時の朱鞠内湖淡水漁業協同組合の組合長から「釣りが好きならここに住まないか」と誘われ、平成9年に長年の夢を叶えるため、幌加内町に移住しました。

当初、イトウに対する中野さんの印象は、この湖に幻の魚が生息することを知識として知っている程度であり、実際に釣り人が釣り上げた姿を初めて見て、現実的に「幻の魚」がいること、そしてその堂々としたイトウの姿に改めて感動したと言います。

朱鞠内湖淡水漁業協同組合では、以前のワカサギ釣りの管理を行っていましたが、イトウ釣りの管理は行っていませんでした。平成14年に、道立水産孵化場(当時)などから研究グループを朱鞠内湖に招き、全ての流入河川の産卵場所を調査したところ、イトウの産卵床数は予想よりもはるかに少ないことが判明し、さらに、イトウに対する地元住民や漁師、釣り人の考え方の違いから、気付かないうちに乱獲につながっていたことも分かりました。

そこで、中野理事長は、イトウを保護

し、その貴重さを理解してもらうために、遊漁料の徴収や産卵床調査、禁漁区域の見回り、キャッチ&リリースの推進などの取組を行いました。特に遊漁料の徴収については、周りの理解を得るのに非常に苦労したと言います。これまでイトウ釣りを楽しんでいた地元の釣り人からは、「本州から来た『よそ者』が遊漁料を勝手に設定した」などの否定的な声も聞かれましたが、現状を説明し、イトウの保護活動を粘り強く続けました。

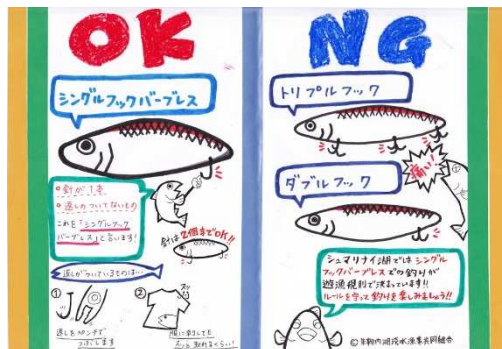
こうした取組によって、地元の人たちや釣り人たちにも徐々にイトウの貴重さが理解され始め、朱鞠内湖のかけがえのない地域資源として認識されるようになりました。

また、中野理事長は朱鞠内小学校でイトウの採卵見学や稚魚の飼育など生体学習を行うなど、子供たちにイトウの貴重さを教えています。

日本初のルール

こうした取組が実を結び、朱鞠内湖淡水漁業協同組合では、平成25年に地域資源であるイトウの乱獲を防ぎ、なるべく少ないダメージで湖に戻せるよう、「キャッチ&リリースの徹底」や「釣り針に返しを付いていない、シングルフックパーブレス使用の義務化」といった日本初のルールを制定しました。湖でイトウが大きく成長できる環境を整えることで、地域資源の保護意識が醸成されるとともに、「大物が釣れるかもしれない」

といった意識を地域と釣り人が共有することで、より多くの釣り人の受入れを目指しています。また、イトウ以外にもアママスやヤマメ、サクラマスなどにも遊漁規則を定め、地域資源の管理を徹底しています。



▲ シングルフックパーブレスについてのチラシ

遊漁と宿泊の連動

こうしたレギュレーション(規則)の設定のもと、釣り人の聖地となった朱鞠内湖には、1年を通してたくさんの釣り人が訪れ、「釣り」をキーワードとした関係人口の増加につながっています。特に、湖畔の宿泊施設「レクハウスしゅまりない」やキャンプ場には、道外の方の利用も多く、連泊率が高いのが特徴であり、中には1か月以上も滞在する人もいます。

また、レクハウスでは道産食材や地元野菜を使ったダッチオーブン料理もあり非常に人気です。



▲醤油風味と生姜風味の2種類の味がある

さらに、第1〜第3サイトまであるキャンプ場には、芝生の上や湖の近くなど好きな場所に車を乗り入れてテントを張ることができ、自然そのままのキャンプを楽しむことができます。

サクッと！ワカサギ

釣り人や観光客が増えてきた朱鞠内地域には、代表的なお土産がありませんでしたが、ここでもスタツフは地域資源である湖に着目します。氷点下41・2度という記録を持ち、積雪量も道内トップクラスの朱鞠内湖では、脂のついた良質なワカサギが捕れます。このワカサギを使った佃煮は、家庭でもよく作られていた郷土食だったので、今では作る人もいなくなっていました。そこで、この味を復活させるために、平成20年からNPO法人シユマリナイ湖ワールドセンターがお土産の開発を始め、3年がかりで「サクッと！ワカサギ」が完成しました。

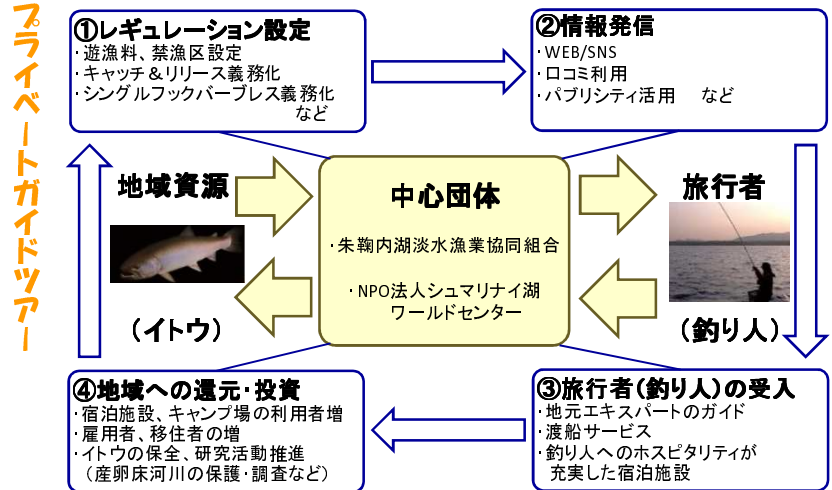
ネーミングのとおり、これまでのしつとりとした佃煮のイメージが変わるサクサクとした新食感で、丸ごとスナック感覚で食べられるお土産は、子供からお年寄りまで幅広い年代に受け入れられています。商品はスタツフが手作業で作るため、量に限りがありますが、平成25年に、北海道に縁のある一流シェフやパティシエなど「食」の第一線で活躍する方々が選ぶ「北のハイグレード食品」に選定されるなど知名度も上がってきました。

イトウをシンボルとして

現在、町ではイトウをシンボルとした地域が持続するシステム^①の確立を目指しており、朱鞠内湖淡水漁業協同組合は、NPO法人シユマリナイ湖ワールドセンターと連携し、道の地域づくり総合交付金や町補助金を活用することで、平成29年から主要河川や未調査の流入河川の継続調査を10年程度行い、産卵床整備計画を策定し整備を進める予定です。

また、町では、平成28年からふるさと納税の寄附の対象にイトウの保護に関する事業を追加しました。平成30年12月時点で、全国の釣り人から900万円を超える寄附金が集まっています。さらに、イトウの保護活動を通じて、様々な関係者と知り合い、朱鞠内湖のキャンプ場でイベントが開かれたり、レクハウス内にショップがオープンするなど、中野理事長は徐々に地域が持続するシステムが確立されている手応えを感じています。

■イトウをシンボルとした地域が持続するシステム



幌加内町との取組の一環として、町のふるさと納税の返礼品の中には、NPO法人シユマリナイ湖ワールドセンターが行うプライベートガイドツアーもあります。深い原生林に囲まれた朱鞠内湖は、自然が豊かで多くのフィッシングポイントがありますが、専門のガイドしか立ち入ることができない秘密のポイントへポイントで案内します。刻一刻と表情を変える、美しく広大な自然の中で、無心にイトウを狙うことができる特別で贅沢なツアーです。1日1組限定ですが、大変好評で、毎年予約でいっぱい状況です。道外からのリピーターも多く、海外からの申込みもあるほどです。

【プライベートガイドツアー料金】

- ・半日プラン: 35,000円
 - ・全日プラン: 50,000円
 - ・ふるさと納税プラン 100,000円以上の寄附
- ※いずれも1ボートチャーター2名まで乗船可能、別途遊漁料を徴収



▼ 2018年5月、ここ数年で最高記録115cmのイトウが釣れました！





つながるカフェで関係人口の拡大

平成30年12月に、道が東京都内で開催した「北海道とつながるカフェ※」において、ゲストにNPO法人シュマリナイ湖ワールドセンターの黒田綾子さんをお招きし、これまで朱鞠内湖で行った取組などを紹介いただきました。

当日は「イトウを守らナイト」と題し、「魚で地域活性化」をテーマに講演され、朱鞠内湖に何度も釣りに行った経験のある方やプライベートガイドツアーの常連の方など朱鞠内湖の活動を応援する多くのファンも集まり、北海道に興味や関心がある首都圏の方々と「釣り」・「イトウ」をテーマに交流を行いました。朱鞠内湖を初めて知った参加者の中には、その雄大な自然やイトウの迫力を紹介され、いつか北海道に移住したいと話す参加者もいました。

今後の展開

中野理事長は今後の展開について、「イトウが増えれば釣り人が増加し、宿泊業などの雇用も増え、キャンプ場などでのイベントも増えることで、地域が元気になると考えて、私たちは取り組んできました。活動して20年、レギュレーションの制定など我々の活動に理解してくれる方も増えて、朱鞠内湖のファンも増えていることがとても嬉しいです。朱鞠内湖はダム湖のため、北海道電力株式会社保有し、湖の源でもある北側の森林は、北海道大学の研究林です。今後、朱鞠内湖やイトウを保護する活動はこうした関係者の人たちとも連携していきたいと考えています。また、地域への還元や経済効果については、NPO法人シュマリナイ湖ワールドセンターが受け皿となって、若手をアウトドアガイドとして育成することで、地域のポテンシャルを生かした費用対効果の高いガイドサービスの提供を行うとともに、地域の人手不足の解消や移住定住の取組にもつなげていきたいです」と熱い思いを語ってくれました。



▶ 北海道とつながるカフェの様子

▶ NPO法人シュマリナイ湖ワールドセンター
理事長 中野信之氏